

(様式9)

企画提案書（企画力の評価）

講座、イベント等の企画内容において、麻布地区の特色を生かした部分を示しながら提案してください。

# OPEN MINA YOKU

みんなでまちをよくする  
プロジェクト

みんなでまちをよくする。まちづくりムーブメント。オープン ミナヨク

**背景** 地域の担い手不足は全国的に課題だが、「地域への関わり方」という言葉に対する解釈も多様で、地縁者が求める担い手像と新しく移住してくる住民や若い世代との間には、感覚の差や熱意の温度差がある。また麻布は大使館なども多く、国際色豊かな土地柄ではあるが、国籍を越えた横断的な交流の場がどこまであるかは未知である。コミュニティサポーターを発掘し育成する際、地縁者の熱意とカジュアルな居場所や人付き合いを求める新しいの住民のギャップを埋める必要がある。

**目的** 講座を開き、そこで生まれる受講生のアイデアから実証実験までの過程において、地縁者や新しい住民との接点を増やし、対話の場を重ねていくこと。「みんなでまちをよくする」を合言葉に、麻布ならではのローカルの在り方を見つけること。既存の仕組みや枠組みを見つめ直し、自然発生的に麻布のまちに愛着を持った次世代のコミュニティパーソン・コミュニティサポーターの発掘と育成を行うことを目的とする。

## 目標・ビジョン

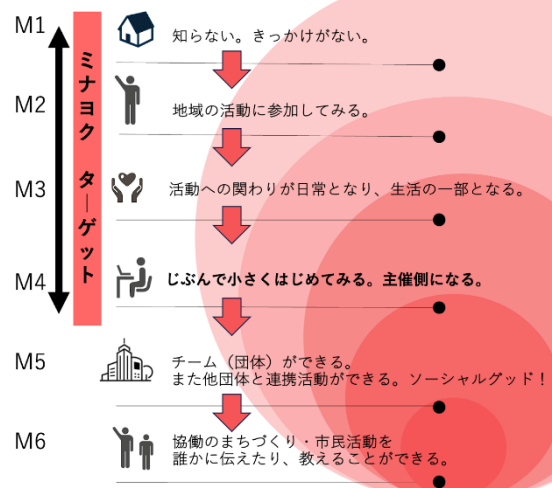
ミナヨクに関わる人々で（修了生を含む）

- ・ 今期受講生による地域プロジェクトの実現  
※ 補足資料⑤
- ・ シビックプライドを持つ人材創出（担い手候補）
- ・ アイデアが集まり交流できる拠点作り
- ・ 運営チームが核となり、まちづくり会社をつくる  
※ 補足資料① 補足資料④

## 特色

- ・ 「みんなでまちをよくする」ために、関わる人々が身も心も場所も仕組みもオープンにしていく。（オープンマインド・オープンリソース）
- ・ 多様性を楽しむ：世代、国籍、異業種など混沌とした麻布の多様性を知り、フィールドワークを通じて自分事の企画に育てる。

**ターゲット** 地域への関わり方は、右図のように関心度やスキルなどが「グラデーション」になっている。ミナヨクのターゲットは、M1～4に表すような地域活動を小さく始めてみたい人々であるが、受講生の自己実現やアイデアに留まらず、地域（フィールド）へ足を運び、手足を動かし、多様な主体同士の対話を通じて、地域側のニーズに沿った企画と実践を行う。



## 講座実施スケジュール

	候補日時	コンテンツ	プログラム	次回にむけて
事前	10月19日(土) 10月20日(日) 16:00-18:00	説明会	<ul style="list-style-type: none"> <li>概要説明</li> <li>卒業生リアル</li> <li>参加候補者の声</li> <li>プチワークショップ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1 on 1 ヒアリング (オンライン)</li> <li>自己紹介シートの記入</li> </ul>
1	11月2日(土) 11月3日(日) 11月4日(月) 15:00-18:00	キックオフミーティング	<ul style="list-style-type: none"> <li>オープニングトーク</li> <li>自己紹介</li> <li>グルーピング(SNS)</li> <li>懇親、交流会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>「ことひと場所」シート記入</li> </ul>
2	11月16日(土) 11月17日(日) 16:00-18:00	学びと体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲストトーク</li> <li>「こと、ひと、場所」ワークショップ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>「ことひと場所」シート記入</li> </ul>
3	11月30日(土) 16:00-18:00	フィールドワークワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>麻布フィールドワーク</li> <li>「こと、ひと、場所」ワークショップ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>「行きたい場所」「会いたい人」シートの作成</li> </ul>
4	12月14日(土) 12月15日(日) 16:00-18:00	フィールドワーク企画ワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>麻布フィールドワーク</li> <li>2 on 1 ワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>「やりたいこと」シートの作成</li> </ul>
5	2025年 1月11日(土) 16:00-18:00	フィールドワーク企画実践ワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>麻布フィールドワーク</li> <li>実践に向けたワーク</li> <li>具体的な壁打ち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>実証実験ワークシート作成</li> </ul>
6	2025年 1月25日(土) 16:00-18:00	実証実験プランニング発表準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>やりたいこと</li> <li>ひとこと場所選定</li> <li>発表プランニング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>発表スライド作成</li> </ul>
7	2月8日(土) 2月9日(日) 16:00-18:00	発表会(関係者参加型)	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係者と協働して発表</li> <li>地域からの参加も</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2 on 1 壁打ち (オンライン)</li> <li>今後のチラシ作成</li> </ul>
	それ以降	各チームへの伴走支援を継続実施 運営メンバー(修了生も含む)で適宜フォローアップ 翌年度も引き続き実働に向けて伴走		

## 開催場所 と ゲスト講師

開催の基本的方向性は「OPEN ミナヨク」。人も場所もできるだけ外へ街へ開いていく動きをスタートする。講座の開催場所は支所の区民協働スペースをベースに、麻布エリアの拠点となる多様な地域資源を活かす。町会や商店街の拠点、神社や寺社、地域貢献やまちづくりに関心の高い企業や店舗、交渉が可能であれば大使館など、地域のキーパーソンのホームである場所へ出向いて講座を開催し、受講生が地域にまみれる導線をつくる。レクチャーをするゲスト講師についてもネームバリューがある大物ゲストではなく、各講座のテーマに応じた実践者のローカリストを選定し、講座を重ねるごとに地域の担い手としてのヒントやリアルなノウハウを得られる流れを創る。必要となる地域人財や場所の手配は、支所と協議しながら地域や地域住民との協働に基づく手法を取り、各関係者の活動や暮らしに過度な負担をかけないように十分な配慮を持って進めていく。

企画提案書（実行力の評価）

本事業で、地域活性化のためのアイデアづくり・実証実験を行うにあたり、受講者からどのようにアイデアを引き出すか、貴社（者）の考えを述べてください。また、実証実験の実施方法を提案してください。

アイデアづくりの引き出し方

受講生を運営側の目的や意図に巻き込み過ぎないように適度な距離を保ちながらも、受講生がまちなかで主役となり、内発的動機づけによってエンパワーメントしていくことで、実証実験で形にしていく機会づくりや協働の場づくりの挑戦を行う。同時に受講生の自己実現や発散だけに留まることのないように、適宜、状況に応じた伴走支援に取り組んでいく。地域性や「麻布の来るであろう未来にそなえたパブリックなニーズ」と照らし合わせて、地域の人々とともに双方向のアイデアを交えながら創り上げていく。



すきなこと・大切な人たち・暮らし営む場所をえらぶ  
目の前の暮らしをよくしていく活動

実証実験について

「やりたいこと、関わるひと、選んだ場所」の3項目を軸とする。アイデアごとに3項目を明確にすることで、一過性のイベントで終わらず、実のある実証実験を目指す。その実証実験の結果をもとに成果と課題（人材不足、祭り、防災、環境美化、その他の地域活性化など）を分析し、ケースモデルとして次年度につないでいく。



アイデアから実行までの具体化 ヒアリングから検証までの過程を下記の図で示す。



① ヒアリング / 1 on 1 / 種 (受講生の関心のありか) を探る

事前の情報収集と効果的な場づくりのために、オリエンテーション前に、受講生の参加動機や関心のありか、何をやってみたいか、得意・不得意を個別にヒアリングする。30分程度の短時間でもオンラインでヒアリングを実施することで、受講生の心理的ハードルを下げ、ミナヨクの趣旨の理解を促す。

② 企画 / エンパワーメント / 発芽 (地域に巻き込まれる)

自分の関心事を起点にすることで、受講生の自発性・主体性を伸ばし、エンパワーメントしていく。具体的にはヒアリングから抽出したアイデアをもとに、運営チームが伴走しながら企画ラフ案を制作。その段階でテーマに沿って、町会や商店街、テーマ別コミュニティに取材に行き、土台を固める。講座で発表して、フィードバックをもらい、ブラッシュアップする。意見交換の際には受講生が等身大の気持ちで発言できるような場づくりを目指す。また地域の人々との対話や関係を構築する場づくりを講座外の時間にも行っていく。

③ チームづくり / 必要な仲間づくり / 水をやる (合意形成)

多様な主体が集めるミナヨクでは、毎年受講生の関心事のジャンルが幅広く、チーム編成には運営チームとの信頼関係が必須である。地域貢献への想いはあっても、一步を踏み出せないのは仲間や共感者が周りにいないことも要因であることが多い。受講生同士が仲良くなることも重要な要素であり、お互いが本音で話せる関係性づくりをアナログでもデジタルでも重ねていく必要がある。各講座後に別途、懇親会も開くことによって、さらなるアイデア出しを促す。(希望者のみ)

④ 実行 / こと・ひと・場所 / 芽が伸びる (小さくはじめる)

小さな一步を踏み出すことの大切さを実感する段階。思い描くゴールを10と定め、まずは2や3くらいからダウンサイジングして始めてみる。運営チームは実行段階で必要な手順、関係者への紹介やコミュニケーション、スケジュールの組み立て、必要なツールなどをサポートする。実行に当たっての経費は基本実費であり、オリエンテーションの時点で受講生に周知する必要がある。捻出方法のアドバイスは行う。

⑤ 検証 / 振り返る / 観察する (次に繋げる)

実行段階でアンケート等の検証材料を集め、結果をもとにデータ検証を行う。自己分析やチームメンバーでの検証を踏まえ、受講者同士や運営チームとの間でディスカッションを重ねる。フィードバックをもとに、次のアクションに繋がる可能性や課題を探り、企画のバージョンアップとデータ化をする。

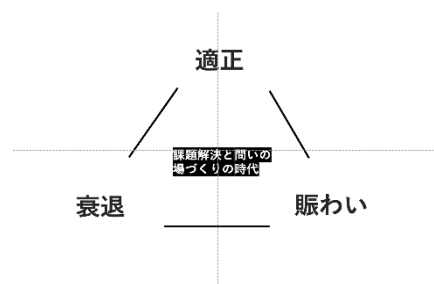
⑥ アフターフォロー

オリエンテーションや講座ごとに、運営側でアンケートを作成し収集する。アンケート結果と個別の反応を観察し、1対1で対話する場を設け、関心事やその変化、不安材料の洗い出しをするなど、個別のアフターフォローを実施する。受講生の性格と反応、タイミングに応じて、伴走する運営メンバーも随時変えていく。

～ 地域の活性化とは? という問い～

賑わいと衰退の間の「適正值」を住民同士が(今回で言うと受講者同士)が問い合うことで、持続可能な地域づくりや、地域活性の本質を探っていく。これこそが協働のまちづくりの必須プロセスであり、大変重要な「問い」である。

近年、全国各地でこの「問い」は、上から降ってくるものであるという意識が強くなってきている。行政任せのまちづくりや、企業頼みの地域キャンペーン。誰かに巻き込まれた地域づくりなど、これ以上自分たちの暮らし(自治)が主体性のないサービスにならぬように、この「問い」に対し、今回受講生と関わる麻布地域の人々と運営者である私たちが一体となって、「麻布にとっての地域活性化とは何か?」をテーマにアイデア出しを行い、実践していく。





企画提案書（知識力の評価）

他自治体や企業等と協働し、活動して得られた独自の知識や経験をどのように本事業に活用するか説明してください。

これまで弊社は、あらゆる地域で自治体・企業等と協働的な活動や事業に取り組んできた。ミナヨクに活かせる具体的事例としては、福岡県久留米市（主に協働推進課）、千葉県君津市（実感の循環学校）、株式会社良品計画との地域活性化事業、駅の活性化などがある。風土や地域性、置かれる環境や街のサイズも異なる中で、他地域の成功事例をそのまま移植すると合併症が起きるため、麻布の街に合ったやり方を模索しながら、住民と行政、大手企業との関係性をコーディネート・実践・検証していく。ミナヨクを通じて、麻布というローカルを2つの軸（大都市≠昔ながらの営み）で行き来しながら、単年度ではなく時間をかけて模索・実践・検証していく。

他自治体での行政や企業等の協働事例について



- CASE 01 - ※補足資料 ①

市民活動団体が地場企業とJV（企業共同体）を組み、協働センターを運営。

久留米ガス株式会社とのJVで、2期目の運用

→ 指定管理期間 5年間 ・ 指定管理料 2000万/年

【受託事業】

- ・ 市民活動団体と企業のコーディネート事業（福岡県）
- ・ 次期総合計画策定「くるめ未来デザインプロジェクト」

- CASE 02 - ※補足資料 ②

埼玉県宮代町で、宮代町役場、東武鉄道、東武ストア、良品計画、住民の5者で「良品計画くらしの編集学校」という地域づくりのフィールドワーク型の学校を開催。令和3年9月無印良品東武動物公園駅店オープン。

（画像：WWDJAPAN「無印良品」が東武動物公園にスーパー隣接店舗 新成長戦略の柱 - より）



- CASE 03 - ※補足資料 ③

元小学校跡地の廃校を活用して複合施設へ。地域住民30名が立ち上げたまちづくりチームをサポート。千葉県君津市にて、君津市と地域住民の協働により、新たな複合施設「おらがわ」を令和6年5月にオープン

（画像：無印良品 ローカルニッポン より）

ミナヨク事業にどう活かすか？

これまで全国の多様な地域に関わってきて痛感することは「地頭自治」の必要性である。「地頭自治」とは私たちが全国各地の地域にまみれた実感から生み出した造語で、自分たちの暮らしを誰かのせいにして、誰かに委ねたりするのではなく、自分たちの暮らしは自分たちの頭で考え、自分たちの手で創っていく自治のことを意味する。

## 私たちが携わってきた経緯や背景

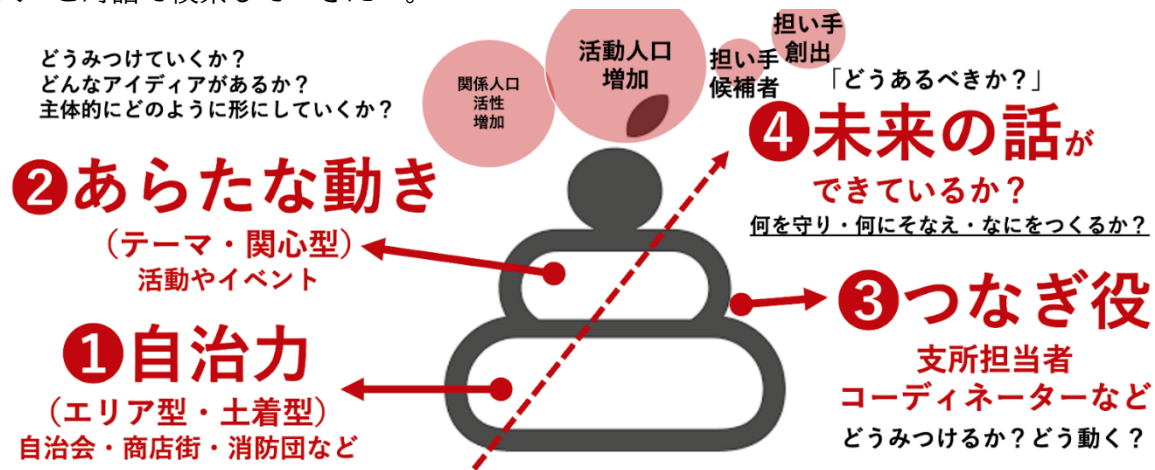
私たちが運営として携わり始めた令和3年度のミナヨク事業は、コロナ禍の真っ只中で三密を避けたオンラインでの開催が中心。従来の地域活動や地縁者とのコミュニケーションも取りづらい状況からのスタートだった。また、本事業に社会的意義を感じ推進していた受託事業者の人事異動なども重なり、修了生の中でも「ミナヨクはどこを目指しているのか?」「運営の関わりがビジネスライクだ。」など小さな不安の声も上がっていた。また運営側も、地域の担い手になる前段階のプロセスとなる、場数やチャレンジの機会の不足を感じていた。

## 私たちが関わってからの手応え

過去3年間のミナヨクを通じて、「地域活動を自分なりにやってみたい」という多彩で熱心な受講生や修了生と関わり、毎回講座の後には希望者で懇親会を開き、関係性を築いてきた。その中で不安の声の真意を聴くと「共感してくれる仲間がほしい」「絆されていく祭や昔ながらの自治の存在を守りたい」「担い手が足りない」といった想いがあり、「自分たちのまちは、自分たちでつくりたい」という麻布の街への愛着が根底に流れていた。不安は愛着の裏返しとを感じるが、そんな本音も会議室ではなかなか拾えない。講座外の個別のコミュニケーション（懇親会、lon1、LINEなど）で拾い集めた、「生もの」である人の気持ちへのアプローチやリスク管理は、今まで地域活動を20年以上やってきて培ってきた経験から来るのもである。

## ミナヨク事業において

今後のミナヨクにおいては、活動の幅やエリアを拡げ、下図のように①地縁者が築いてきた自治力を土台に、②受講生や修了生によるテーマ・関心型の活動を増やしていくことで、麻布の関係人口・活動人口が増え、その中から担い手の候補者が生まれていく流れをつくっていく。その際に、①と②をつなぐ③つなぎ役の役目が重要であり、③の役割を修了生も含めた運営チームと支所の方々とのタグによって強固な連携プレイを図りたい。昔は①②③の役割を地縁者がすべて担ってきたが、首都の宿命というべき麻布の流動的な街の動き、再開発のスピードの激しき、すべてが商業ベースになりがちな土地柄などで地縁者の疲弊も感じる。麻布十番商店街の「十番ルール」のように、あらゆる人たちと④未来の話ができていくか? 麻布ローカルの在り方に関わる人々と対話で模索していきたい。



今後のミナヨクの近い将来を考える時、少ない人数からでも、麻布の街に愛着を持った民間の有志メンバーが集まり、「麻布の地頭自治」を責任をもって創っていくような「麻布のまちづくり会社」の必要性を感じる。「麻布のまちづくり会社」のイメージは、誰もが行き来できる拠点を構え、麻布の街に貢献できるようなパブリックワーク（公共慈恵）を生み出し、そのような人材が集まり、麻布の「まちの適正化」を問うような機能を持つ。

このまちづくり会社事業の可能性は麻布エリアだけに留まらず、首都の中心である立地を活かし、全国の他自治体やローカルプレイヤー達が麻布ローカルに集結し始める余地を含んでいる。全国各地のヒト・モノ・コトが交流することで、新たな関係人口・担い手候補も創出していく。また災害時などいざという時のセーフティーネットとなるようなネットワークに育てていきたい。



(様式12)

企画提案書（発信・サポート力の評価）

- ・本事業により多くの人に興味を持ち、参加するために、どのように発信及びPRをするか提案してください。
- ・本事業（講座終了後も含む）において、①受講者（修了生を含む）同士の交流の場の創出、②受講者と地域との対話・交流の機会の創出について、貴社（者）の考えを述べてください。

ミナヨク公式ホームページを開設

若い世代の担い手、次世代のコミュニティサポーターを発掘するためには、ミナヨク事業自体の存在を、手のひらのメディアでもある個々人のスマホで簡単に閲覧できるメディアが必要である。



受講生からの応募に応えるためには、麻布支所の公式HPと連動した右のような独自のHP（ランディングページ：スマホでも気軽にアクセスできる①～⑧の項目を含む一枚モノのプロジェクト紹介ページ）の作成を行う。このミナヨク公式HPによって、目的に沿う感度の高い受講生を集める入口をつくる。講座内容や受講生の企画紹介や実証実験の進捗状況、講座を通じた気づき等をアーカイブするとともに、修了生の活動紹介ページのリンク等も充実させていく。

ミナヨクからうまれた  
ミナヨク派生プロジェクトの紹介ページ

サイトの最後部分（黄色部分）には、これまでミナヨクで立ち上がった地域プロジェクトや、今期の受講生が生み出したプロジェクトの紹介バナーを作成し、各プロジェクトサイトへ誘導できる枠組みを整える。受講生や修了生が自分たちの企画を地域の人々へ持ちかける際には、各活動が見える化されたミナヨク公式サイトを活用することで名刺代わりとしても活用できるツールとなる。また、各自のSNSでのシェアや拡散も行えるような発信・PRの支援枠組みを整えることで、協力者に「ミナヨクがどういうものなのかを知ってもらおう」キッカケ（信用材料）の受け皿となる。

運営側がシンプルでわかりやすいプロジェクトサイト一覧にワンストップでアクセスできる仕組みをつくることで、ミナヨクに対し、より多くの人に興味を持ち、関係人口を増やすことが目的である。また、講座後半の時期には、地域SNS「PIAZZA」を活かした情報発信も念頭に置きながら、支所の方々と運営チームで備えて協議の議題とする。

ミナヨク公式サイト-イメージ-



## ① 受講者（修了生を含む）同士の交流の場の創出 ～リアルとデジタル／両軸の交流の場～

リアル（対面）は、講座の中で受講生同士ができるだけ横の繋がりができるように、心理的安全性を生み出すような場づくりを行う。運営チームは受講生と1on1の対話を重ね、アフターケアも重視する。Day1とDay7の終了後に懇親会を開催し、その他にも、講座終了後に集まれる場を任意で開く呼びかけを行うことによって、本音で話せるような仲間づくりを目指す。デジタルツールを活用したコミュニケーションにおいては、LINEワークスで情報交換やプロジェクト管理、事務連絡、アンケート収集などの運営管理を行う。また匿名性の高いLINEオープンチャットなどを活用することで、より細やかな意見交換や発信にも取り組む。また「麻布FANクラブ」「みんなのラジオ」「AZABUGO」など修了生が実施しているプロジェクトに対しても、リアルとデジタル両面からアプローチすることで、積極的に受講生が関われる雰囲気醸成するとともに、修了生にも講座や懇親会に参加してもらう機会を創る。修了生との交流に際しては、「場」自体が熱心な修了生の独断場とならないように、適宜、受講生の発言を取り上げるなど、自然な感じでのファシリテーション（影ファシリ）を行い、両者の関係性を深めていく。

## ② 受講者と地域との対話・交流の機会の創出について

講座やフィールドワークを通じて、地域の祭りへの参加、各種イベントへの参加の機会を創るために、既存の地域事業（例：麻布未来写真館、あざぶ達人ラボ）とのコラボ窓口を整える等、受講生が地域に入っていくためのコツを体感できるような導線をつくる。東麻布商店街や麻布十番商店街、六本木龍和会、妙善寺など、これまでの麻布を支え、昔ながらの麻布を知る人々との交流を促進するとともに、麻布中学校や高校、慶応義塾大学生（かかし祭サポートチーム）、大使館等、新たな領域・ジャンルの人々とのコラボも発掘していく。

## おわりに

麻布という街は、高層ビルがひしめき合う中に確かなローカルがあり、国際化そのもの、多様性の最先端ともいえるべき街である。行き届いたサービス、消費社会のど真ん中に、泥臭いウェットな人付き合い、居場所を求める人々の姿が見える街である。ミナヨクプロジェクトは、受講生や修了生がミナヨクに関わることで、改めて麻布を実感することができ、その過程で自分自身が麻布の住人として、どこか安心できる居場所の一つを見出していく取り組みでもある。また、人口規模は違えど、「麻布のカオス（多様性）」をお手本にできるローカルプレイヤー達が他の自治体や市町村などには点在している。

その昔、日本中の大名が藩邸を江戸に構え、交流していた歴史になぞらえ、麻布が一等地である立地を活かし、麻布との接点を求める日本中のローカルプレイヤー達との文化交流や全国の地域資源等の連携を図るべく、令和の参勤交代とも言うべき往来の可能性を模索したい。

地方創生と叫ばれて早10年。全国で地域活性化は進んでいるが、経済面においては「商品はあるが買い手がいない」「産業はあるが担い手がいない」等、資源不足、人材不足は持病のように課題である。例えばオンパクの「オンパクサミット」のように、全国共通の地域課題を各地のローカルプレイヤーや自治体、企業などが集まり、各々の知見を共有しながら、未来につながる交流を深める拠点として、麻布という街は最適である。さらに、あらゆる領域において国境を軽々と超えている今、人種や業種が多彩に混在し、許容する歴史の長い麻布という街は、国際化を余儀なくされる日本のモデルとなるべき街である。また、ミナヨクに集まる受講生も第一線で活躍している人々が多く、スペックも高いのは、他の街とは明らかに違うアドバンテージである。まちづくりにおいて正解はないが、このミナヨクを通じて見たい未来のイメージは大きい。その可能性を最大限に開拓していくための動きをコツコツと積み重ねていくスタートラインにしたい。